

第1学年1組 道徳指導案

1. 主題名 4-(1) ネットワーク社会の「光と影」を意識させながら、自他の権利を重んじ、社会の秩序と規律を高める。
2. 資料名 「このメール、どうしよう」(自作)
3. 題材のとらえ方

<この生徒を>

虎三郎はその後のことも考えて(三根山藩からもらった)米を売った。それはそれですごいと思う。でも、百俵の米を全部金に換えなくても……

(1/13「米百俵」のH男のカードから)

やっぱり、学校を建てて人を育てることがいい。T男君の言っていた大参事(虎三郎)は「自己中」かもしれないけど、みんなのことを考えるには金も知恵もいる。

(同 話し合いその後の聞き取りから)

さまざまな資料に出会い、特にジレンマ資料などから葛藤をとおして自己を向上させてきた生徒たちである。資料「米百俵」(山本有三作)では、戦いに敗れた長岡藩大参事の小林虎三郎がとった「米百俵を売って学校を建てる」行動にほとんどの生徒が賛同していた。しかしそんな中、H男の記述が目にとまった。他の生徒たちは本音で賛同しているのか、H男のように目の前の危機に直面したとき「米を配給」してしまわないか、考えさせられた。

しかし、話し合いの中でT男が「大参事は他人の意見も聞かない「自己中」で(金に換える)判断した」という意見に対して反論した。その中でH男は自分の考えを高めていったと考える。

A子は、道徳で他の意見を聞くおもしろさを「今日意見は言えなかったけれど、道徳はみんなの意見が聞けて楽しい」と生活のあゆみに書いていた。意見を交わす楽しさ、様々な意見を知るうれしさを感じさせながら社会集団でのマナー、特に情報のあふれる今日だからこそ正しい判断力を育てていきたいと考える。

<この資料で>

情報のあふれる今日、生徒がコンピュータや携帯電話のWeb、ブログ、メールなどからさまざまな「情報」を取り入れている。しかしそれらの情報には、悪意のあるものも多く、本校の生徒にもトラブルに巻き込まれたり、自分の発信した情報が原因で友人関係がうまくいかなくなってしまうこともある。

自作「このメール、どうしよう」は、前半部分で、信頼度の高いテレビの天気予報で知り得た情報を伝達し、母から感謝されたことで、情報を伝える有意性を印象づける。そして後半部分では希な血液型の輸血を求めるメールを転送すべきかどうか葛藤する場面を設定する。差出人が不明なメールだが命の危険を救ってあげたいという気持ちと、信頼性の低い情報を伝えて良いものかという気持ちの葛藤することを通して、社会への影響や自分の役割を自覚して判断する高次の段階へと道徳性を高めることにねらいがある。

情報モラルの立場では、「多くの人がパニックになるかもしれないから」「信用できない情報を送ることでみんなが不安になるから」メールを転送しないと考える。しかし、「伝えるべき情報は伝える」「本当に緊急だから」「命に関わることだから」とメールを転送する場合も認めたい。

今後も多くの情報の中で生徒たちは生きていく。正しい判断力を身につけさせたい。

<この指導で>(本時の指導)

授業では、まず、資料を配付し、各自カードに「思ったこと・感じたこと」を書かせる。その中から教師が第一発言者を指名し、その後は相互指名により誰がメールを転送した方がよいか、しない方がよいか話し合わせる。またメールの差出人や内容の重要性・信頼性を吟味する中でそれぞれがどこに注目して判断しているか、その部分は明らかにしたい。

様々な考えを出し合う中で、文字での伝達の怖さも考えさせたい。

4. 本時の目標

- ・受け取ったメールの内容や信憑性を吟味し、主人公のとるべき行動を考えることができる。(徳目)
- ・情報モラルを意識し、これからのネットワーク社会に対応するマナーを考えることができる。(情報モラル)
- ・資料に対して自分の考えがもて、積極的に話し合いに参加することができる。(授業)

5. 予想される生徒の反応

メールを転送する	メールを転送しない
・命に関わる大切なメールだから ・早くしないと大変だから ・出した人は喜ぶだろうから ・せっかく送ってくれた人に悪い ・人に喜ばれるから ・よいことをする人だと思われるだろうから ・社会の一員として、必要な情報は伝える必要があるから	・内容が疑わしいから ・先生や親が出してはいけないと言ったから ・出すと、他人から文句を言われるかもしれないから ・メールをもらった人に迷惑をかけてしまうかもしれない ・多くの人がパニックになるかもしれないから ・信用できない情報は人を不安にさせるから ・メール利用者に迷惑がかかるから

6. 評価

- ・メールの転送に対して自分の考えをもち、話し合いに参加できたか。(徳目・授業:発言・カードより)
- ・情報の信頼性を考え、マナーを意識するように心がけたか。(情報モラル:発言・カードより)

【指導にあたって】

4月以来様々な資料を使って道徳の実践を行ってきた。

A 人との関わりの多い資料の提示

取り上げる資料は生徒の身の回りにある身近な出来事を中心に、文科省や市販の資料などに手を加え(部分提示など)、毎回プリントを配布してきた。

B カードの利用

資料の提示(黙読)後、「思ったこと、感じたこと」をカードに書かせ、提出させる。これは、およその生徒の考えの把握と、授業の組み立てをするためのものである。カードを座席表として蓄積することで、生徒の考えの変容もとらえられる。

C 話し合い活動

自分の考えに近い者を指したり、普段あまり手の挙がらない生徒を指名するなど、4月初から相互指名のルールを決め、取り組んできた。

中学生ともなると競って手を挙げることは少ないようであるが、本学級では次のような取り組みにより、比較的意見が飛び交い、生徒の発言だけで内容に深まりがみられる。

話し合い4箇条

- ① 自分の意見に近い考え、または自分の考えを補足してくれる意見をもった仲間を指名する。
- ② ふだんあまり手の挙がらない仲間が手を挙げている場合は、必ず指名する。
- ③ 「同じです」とは言わない。必ず自分の「言葉」で言う。
- ④ 30秒以上話し合いが進まなければ、最後の人が誰かを指名する。

これらは、道徳の時間だけにとらわれず、学級活動などにも次第に広がってきている。また教師は、話し合っている内容についての板書を中心に、話し合いの軌道修正など援助に努めるようにする。

道徳は心の教育であり、生徒の変容はすぐにはあらわれない。年間をとおした指導計画と変容の記録をとる必要が出てくる。そのためにカードを利用している。このカードには主に資料の提示後、「思ったこと、感じたこと」(最初の感想)をカードに書かせ、教師に提出する。これに基づいて生徒の考えの把握と授業の組み立てを考える。カードを貼った座席表をつくれば、個の変容もとらえられる。また座席表を時折学級通信などでクラス全員に伝え、お互いの考えを知る資料に役立てようと考えている。

以上のことより、多面的な立場から主題に迫っていくように、生徒を指導している。